

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 井伏鱒二 『黒い雨』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 39 回のツイキャス読書会の課題図書は、井伏鱒二先生の『黒い雨』です。

この機会に皆さんと読めて、とても良かったです。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

広島・長崎でなくなった方々に、哀悼の意を捧げます。

黒い雨 井伏鱒二 感想文

昭和二十年八月六日の午前八時十五分、事実において、天は裂け、地は燃え、人は死んだ。

事実において、あの瞬間から広島は地獄へと変貌した。日本国民は戦争が末期だと感じつつ、誰もここまでの無残な体験をしたことはなかった。閑間重松の「被爆日記」は、原爆投下からの10日間に見た景色と心情を克明に綴り、数年経ったのちに、姪のお見合いのために清書されたもの。原爆の体験は、その後の生活にも、深い不安と憤りや怒りに裏打ちされているはずなのに、どこか淡々とした無欲無私な印象の記録。

田舎で平穏な暮らしに戻りつつある日常に描かれた自然は、ただ美しい。小さな生き物も花も人間も、状況などわからぬままに、生きのびた命をいとおしみながら生き抜く。

原爆は、敵国が広島に投下した。落としたのも、落とすように命じたのも、原子力爆弾を作ったのも人間。人間は自分たちは愚かだと知るのはいつになるのだろう。無辜の民の犠牲は、殉教なんかじゃない。国のためへと誓って捧げた命は、敵地ではかなく消えてしまった一方で、国に残った非戦闘員の庶民を巻き込む必要はなかった。神が与えた罰だというのだろうか。人が人に与えた地獄。戦争のときだけ人を殺していい理由はどこにもないはずなのに。

「白虹、日を貫く」

どうせ叶わぬかもしれぬ矢須子の回復への願いが、もしや叶えられるように、重松は白い虹は望まない。天が与えた黒い雨を恨む言葉よりも、明日の姪の幸せを望む重松の気持ちが切なく心に突き刺さった。玉音を聞いて悔しく涙した日本人の正統じゃなくてもいい。あのときの悔しさは人それぞれにあったのだと、読みながら仰いだこの夏の雨に教えてもらった。

(おわり)

『黒い雨』 感想文

YouTube で映画を見た後、本が読みたくなり、図書館で借りて読みました。

映画の方は矢須子中心の内容でしたが、本は「被爆日記」を中心に、当時(戦時中、被爆時、その後、)の悲惨な被害状況や生活の様子が目に浮かぶように詳しく書かれていました。

また、205 ページの 3 行目「いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい。」

と

206 ページの 10 行目「わしらは国家のない国に生まれたかったのう」の記述に作者の国に対する怒りが読み取れました。

私は当時の状況を知り、二度と同じことが起きてはいけないという危機感を大きく抱きました。この過去の出来事が、現在の世界状況では、日本で明日にでも起きてもおかしくないからです。

そこで私は、今後のために、被害を少なくするにはどうしたらいいか、何を食べても安全か、病状はどう変化するのかなど、「災害ハンドブック」を読むように、この本を読みました。本には被爆について知らなかったことが詳しく書かれていて、悲しいことにとても参考になりました。これが福島でのゲンバツ事故の時、生かされていないことに腹が立ちました。ちなみに私は忘れないように紙に必要なことを書いて家にある「災害ハンドブック」と一緒にしまいました。

食糧難が起きた時に食べられる身近な草、虫、茎、実、根についても書かれていたので後日、もっと詳しく調べたいと思っています。

でも、地下にシェルターでもない限り、もし日本が核戦争に巻き込まれたら、当時より悲惨な結果になるのは想像できるので、私が紙に書いたことは無駄かもしれませんが、、、、、、。

怖いです。神様、政府様、こんなことが起きませんように、、、、。お願い致します。

(おわり)

『黒い雨』 感想文

私は、この小説を読むまで広島に原爆が落とされた事は知ってはいましたが、もうずいぶん昔の事で、生まれる前の事だし、親類に被害に遭った者もないし、他人事でそんなに深く考えた事はありませんでした。

原爆はその当時、誰も知らない未知の兵器でものすごい光りと破壊力でその瞬間までそこに存在したものの、ほとんどすべてを吹き飛ばし何の罪もない人たちを恐怖のどん底へ突き落とす、本当に恐ろしいものだと思います。

さらに恐ろしい事に、その後に降った黒い有毒な雨に打たれて矢須子のように原爆病になって苦しい思いをされた方たち、今も苦しんでいる方たちの事を考えるともう二度とあってはいけない事だと改めて思いましたし、忘れてはいけない事だと思いました。

今なら、原爆の恐ろしさ、有毒な事など知られている事も多いけれど、当時は何も分からないまま、火傷をおって、病気になり、苦しまれた方の恐怖がどれほどだったか想像してもしきれないと思いました。

今まで、テレビで原爆が投下された日に当時の事が語られたり、写真を目にする事があっても特に何も思わずにいたような気がしますが、今年は今まであまり何も考えずにいた事を反省しながら観ていました。

途中、読んでいて悲惨な状況や、被害にあわれた方の様子などが細かく書かれていて辛い気持ちになりましたが、シゲ子による当時の食事について書かれている所は、食糧難のなかで配給の玉ねぎをすぐに食わずに植えて葉が伸びると摘み取ってお汁に入れたり工夫して生活の知恵を活かしている様子が生きる力を感じられて良かったなと思いました。

最後に、重松が矢須子の病気が治る事をあきらめずに希望を持っていて、私も七色の虹がきっと出る！ と思えました。

(おわり)

『黒い雨』 感想文

ざっとですが、原爆で亡くなった方をネットで調べてみました。

約9~16万人で正確な数字は不明だそうです。

原爆の爆心地 1.2 キロの範囲では 50 パーセントの方が亡くなり、近いところでは 80~100 パーセントの方が亡くなっている。

また黒い雨というのは、北西部に 20~30 分降り、11 キロから 19 キロの範囲では大雨。

15~29 キロまで小雨が降り、強い放射線を含んでいるため、その水を飲んでしまうと下痢や体調を崩すんだそうです。

また被爆した年齢が若い人ほどガンになったり、5 年ほど経ってから白血病を発症したりしたようです。

途中途中のリアルな死体描写が文字だったので、まだ救われましたが、漫画のはだしのゲンでも凄いインパクトがあったので、不謹慎かもしれませんが仮に原爆後の街を歩く VR とかもし体験出来るなら地獄のような広島を体験してみたい気もしました。

ただ確実に吐いてしまうかもしれません。

今回の読書は無力感でいっぱいになってしまったので、印象に残った文章を抜粋しました。

《戦争というのは老若男女をなぶり殺しにするものだ》 87 ページ

《一寸さきは地獄だぞ。焼け死ぬぞ》 125 ページ

《戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義よりも不正義の方がいい》 205 ページ

《矢須子は次第に視力が弱って来て、絶えず耳鳴りがするようになったと云っている。はじめ僕は茶の間でそれを打ちあげられたとき、瞬間、茶の間そのものが消えて青空に大きなクラゲ雲が出たのを見た。はっきりそれを見た——後日記》279 ページ

重松さんは、矢須子が早く嫁に行くのを願っていたが、矢須子が原爆病にかかってしまったのも申し訳ないと気を遣ってしまう描写が切なかったです。

もちろん矢須子本人が一番辛いと思いますが、重松夫婦のことを思うと、矢須子から病気を打ち明けられた時、さらに精神面にも原爆が投下されさぞ悔しかったと思いました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

黒い雨の感想文「自己欺瞞を腹に蓄えて」

奈良岡朋子さんの朗読を聞いて書きました。

お見合いをする為に被爆者ではないと医師の診断書を見せ、わざわざ日記や原爆投下の日の食事内容まで清書して出そうとするおじさんに対し僕なら

「国が始めた戦争でしょ、原爆を落としたのはアメリカだし。おじさんにそんなことまでさせて結婚なんてしたくない」

と、言います。

僕は以前転職希望先に面接に行った際、履歴書の備考欄に「進行性に視野が欠ける疾患があるが日常業務に支障なし」と記載した履歴書を見た現場責任者のような方に

「こちらは貴方を採用して、途中で貴方の目が見えなくなっても簡単に解雇できないんですから、医師の診断書をつけたとしても幾らでも嘘はつけるでしょ？」

と言われた経験があり、被爆差別を受けたくはないという矢須子さん、そしておじさんの気持ちを少しは理解できたつもりです。

ただ食事の場面でおじさんが「ドジョウの泥をよく吐かせろよ」と言ったのは自分も同じ事をすると思います。

福島で採れた米や野菜、魚介類は美味しく食べますがチェルノブイリ周辺で採れた農産物を食べたいとは正直怖くて思えません。僕は自己欺瞞と言う名の汚れた泥を腹に抱えた偽善者です。

前述の職場からは不採用の通知が来て今は理解ある職場で働いています。いつか僕が面接官の立場になって、求人票を見て来てくれた人に対し、障害があるからとか、子育て中の女性だから、と言った理由で「幾らでも嘘はつけるよね？」と言わない為に、自分自身と他者を見つめられる人でありたいとこの作品に触れて思いました。

暗く重い話でしたが、矢須子のお見舞いに来た村のじいさんの話など笑える箇所もあり、矢須子も病床で笑っていたのに救われました。

(おわり)

『黒い雨』 読書感想文

私は、罹災経験がないので、尚更戦時中の様子を 100%想像で考えることしか出来ません。高校生時分戦争について書いた作文で「現代の平和な時代に生まれてよかった」という素直な感想に対し、考えが浅はかだと教師に添削され、イラっとした事を思い出しました。現代にも様々な問題があり一概には言えないという事なのかもしれませんが、秤にかけられない圧倒的な何か底知れない理不尽が戦争にはあると思うからです。

「黒い雨」を読んで、その思いがもっとグッと強くなりました。

154 ページ、「横暴の観が際立っていた」陸軍中尉の靴に握り飯を放り込むシーンがあります。非戦闘員である一般庶民は敵国以前に自国の軍人からの抑圧があり、内心では憎悪していた。

150 ページ、電車で婆さんに席を譲った少年の話。木材に挟まって身動きが取れなくなり父親に助けを求めるも、逃げてしまった父親。再開できたのにもかかわらず気まずさから、父とは今生の別れとなってしまう。悲しすぎます。

303 ページ、岩竹さんの手記。中年で太鼓腹の中村予備員が 23 歳の教育係りに蹴られているのを目の当たりにして「倅におどかされた親爺のように、その顔には当惑と失望の色が隠せなかった」と書いています。中村さんは断腸の思いだったと、想像できます。

これらのエピソードはまだまだ序の口です！

「戦争は、貧民窟がなかった広島が食生活に困るようになり、老若男女を捌り殺しにする」シゲ子の手記の通り、人の命や生活の軽視は勿論、その上での精神的な暴力は、戦争時に最も著しく現れ、日本全てが狂ってしまうのだと、更に思うことができました。

最後に、110 ページ、今までしてきたことが飯事(ママゴト)であったように思われて、今までの自分の生活も玩具の生活であったような気持ちでした。「どうせ何もかも飯事だ、だからこそ、却って熱意を籠めなくちゃいかんだ。」この記述に深く深く感銘を受けました。

(おわり)

井伏鱒二 『黒い雨』 読書感想文

小説に出てくる原爆投下後の広島の様子は、とてもむごい。溢れる死体や生きた人体からウジ虫、弁当に黒い渦を巻いて群がるハエなど。

これだけ甚大な犠牲を出して、終戦を迎えたという事実に関心が痛い。たった 72 年前の夏のことだ。

原爆投下後まもなく郡部各町村から救護部隊が繰り出されたり、医師会や消防団員などが有志で救援活動していたことは知らなかった。戦時中に隣組など近所の見守り体制が作られ、バケツリレー等普段から訓練していたことなど、有事への備えを通じて住民自治が育っていった過程も興味深かった。

重松が家族や職場で、自分の社会的役割を認識し、精一杯対応している様子が頼もしく感じられた。目の前の生活の立て直しに身内や知り合いを頼りながらできることに取り組む重松だったが、不思議に悲壮感が感じられない。原爆症で苦しむ姪の矢須子への思いは被爆日記の清書というプラスエネルギーに向かわせた。そこから静かな戦争への怒りも伝わってくる。

しかし、原爆投下直後、ピカドンも黒い雨も一体何者かわからず、非常事態きわまりない中で、一体一人一人の気持ちはどこに向かい、収まって行ったのだろうか？とモヤモヤが残る。

先週福岡県朝倉市豪雨災害の現地に出向いた時、たった数日の復興活動だったにも関わらず、人が亡くなり今もなお捜索中である現場に足を踏み入ると、炎天下の暑さや体の感覚が感じられず、なすべきミッション以外は頭に入らない。そんな独特のテンションに見舞われた。当然夜間も眠れない。

『僕の体は光の玉と爆風のほかには何も感じなかった』新潮文庫 p108

重松の手記にあるように、ただごとではない有事に遭遇すると、人はアドレナリンのスイッチで自分の体や心の痛みを見失うのではないか。個が失われるというか、自分と他者と現実の境界がわからなくなる。戦中は多かれ少なかれそのような精神状態が恒常化していたのではないか、とってしまう。

玉音放送を聞いた工員の気持ちが徐々に緊張感が解けていく様子が描かれていたが、民族を一つにまとめた戦争の終わりは、簡単に個々の頭に消化できるものではなかったのではないか。受け止めにはとてつもない時間がかかるはずだ。私の頭のテンションも、未だに収まる様子がないのに困っている。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 雨のち虹 』

私は十代の頃、広島市内を走る路面電車に乗って、一番の繁華街である紙屋町に遊びに行くのが楽しみだった。草津から天満町を抜け、いよいよ紙屋町の電停だ。その三百メートルひとつ手前の電停が「原爆ドーム前」電停である。「次は～原爆ドーム前～」というアナウンスが聞こえたら降りる準備をするのが習慣だった。ほんの七十二年前にそこで何があったかなんて、全くリアリティに欠けていた頃の日常だ。

この小説の閑間重松の姪の矢須子は、被爆の疑いをかけられ、縁談が持ち上がるたびに破談になる。命が助かったとはいえ、また別の苦しみが始まる。

そんな矢須子のために、重松は被爆していない証拠のために、原爆投下時の矢須子の日記と共に、自らの被爆日記も清書を始める。

淡々と描かれる原爆投下直後の様子は、逆に胸に迫る。何気ない日常の中に、一粒の有事があれば、感情も動かし涙も出るのだろう。だが、圧倒的な悲惨な状況下では、悲しみとそうでないものの区別はつかないし、涙も出ない。原爆は肉体だけでなく、精神的にも破滅させてしまう。重松の日記から、あまりに悲惨な未曾有の状況下で感情が麻痺している様が伝わってしまうのが哀しい。

以前、広島駅のベンチで高齢の男性と隣り合わせになった。その男性の指からは、黒い爪が生えていた。黒い爪は被爆症のひとつとされ、原爆資料館にも展示されている。テレビや資料ではなく、実際に生存している方の手元から見る衝撃は計り知れなかった。その後は黒い爪を持つ方を見かける度に、あの原爆投下時を重松のようにくぐり抜けて、いまだ体の中に原爆を抱えているのだと思うと言葉が見つからない。

広島市のHPでは、いまだ「黒い雨体験者の健康不安相談」のページがある。毎月配布される広報誌にも、原爆医療や原爆手帳交付についての報せが必ず載っている。戦争はこれから始まるのではない。まだ終わっていないのだ。

ただ、人間にはパンドラの箱のように最後は希望が残るといふ。黒い雨の後には、重松が望んだように「五彩の虹が出たら、矢須子の病気が治るんだ」との想いを信じたい。

壊滅的だった広島市だって、今は緑が豊かな都市なのだから。

(おわり)

「黒い爪」 <http://www.pcf.city.hiroshima.jp/outline/index.php?l=J&id=34>
<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=%E5%8E%9F%E7%88%86+%E9%BB%92%E3%81%84%E7%88%AA>

「黒い雨の健康相談」 <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1396412187994/index.html>

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『帰らざる故郷』

(引用はじめ)

僕も食堂を出ると、もう一度鰻の子の遡上を見るために非常口から裏庭に出た。今度は慎重に足音を殺して用水溝に近づいたが、鰻の子は一匹も見えないで透き徹った水だけ流れていた。

(引用おわり)

八月十五日正午、玉音放送の前に、閑間重松は、鰻の稚魚が、勤務先の工場の用水溝を遡上しているのを観察した。『広島が爆撃された八月六日ごろはどのあたりも遡上していたことだろう』鰻や、サケ・マス、渡り鳥は、帰巢本能が発達している。鰻は、海で卵を生み、稚魚は、川を遡って、そこで成長する。鰻の生態は、謎に包まれていて、遡る川が、親の成長した川と同じなのかは、よくわからないが、成長するために川を遡るのである。

正体不明の爆撃で、一般庶民が悲惨な目に遭う様が克明に記されている。富国強兵の末路が、広島と長崎の原爆投下だった。それは日本史の不可逆的な節目だ。原爆を境に、日本人は、長い歴史で積み重ねてきた価値観の多くのものを失い、別の価値を模索して、現在に至る。

戦後、原爆症を患った閑間重松は、同じ患者の庄吉、浅二郎とともに、鯉の養殖をはじめた。戦前までの日本人には日本人の帰るべき川があったが、戦後は、新しい溜池に移され、養殖されることになったような、そんな戦後の日本人のもどかしさが、鰻と鯉の挿話の対比から感じられた。

戦争で負けるということの過酷さというのは、原爆投下を境に、日本人が全く違った生き方を強いられているというところにある。日本国憲法の『国民主権・基本的人権の尊重・平和主義』の三原則を、素直に受け入れることができない鬱屈の奥底には、失われた民族の尊厳への怒りがある。もう帰るべき故郷がないという喪失感への怒りだ。原爆が破壊したのは広島・長崎だけでない。日本人の帰るべき心のなかの故郷が、焦土と化して、汚染され、今も失われたままであるようなさみしい気持ちになった。

この怒りとさみしさを、平和への願いにかえて生きること覚悟こそが、戦没者への最大の慰霊だと、私は思う。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343